

昔むかし、大むかし。まだ人間がいなかったころ。大地はまっ平らで、動物たちは、大平原で、みな楽しく暮らしていました。ところが、ある夜のこと、世界じゅうのあちこちに、音もなく、しわがよりはじめました。しわは、どんどん深く高くなり、あれよあれよといううちに、こんどは、足の下から煙がふきだしてきて、火とどろをふきあげました。そのどろが積もって、大入道のような山が、あちこちに生まれました。

日本で特別大きな山は、八ヶ岳と富士山でした。八ヶ岳と富士山は、頭から湯気を立てて、背の高さを競い始めました。どちらもぐんぐん伸びていきましたが、先に生まれた八ヶ岳のほうが高くて、富士山はどうしても追い付けません。

得意になった八ヶ岳は、伸びに伸びて、とうとう天に頭が届いてしまいました。そこで、八ヶ岳は、天をつきやぶってやろうと考えました。ところが、ぐいっと伸びたひょうしに、頭から三分の一ほどの所で、ぼつきり折れてしまいました。アツと思いましたが、どうしようありません。

それでも伸びようと、八ヶ岳はがんばりました。すると、折れた所から、頭がいくつも出ました。けれども、背は大きくなりませんでした。

こうして、背くらべは、富士山が勝ちました。

八ヶ岳は、くやしがつて、毎日泣いていました。十六もの目から涙を滝のように流して泣きました。その涙がたまって、せきを切ったように流れたあとが、今でも山の南の方に残っています。

さて、このようすを見ていた鞍馬山の大天狗が、気の毒がつてやって来ました。そして、子天狗に、赤岳のてっぺんに社を建てさせ、折れた頭は南東の山腹に置いて、まつらせました。赤岳の南に大きな岩がふたつありますが、これは、大天狗と子天狗が岩になったのだといわれています。

おしまい

富士山と八ヶ岳の背比べには、こんな言い伝えもあります。

むかし、まだ八ヶ岳のほうが富士山より高かったころのおはなしです。富士の女神さまと八ヶ岳の男神さまが高さくらべを始めました。

「わたしのほうが高い」「いや、わたしのほうが高い」といい合って、ゆずりません。そこで、

「それじゃあ、しかたがない。阿弥陀さまに決めてもらおう」ということになりました。

阿弥陀さまは、

「それは、こまったことだなあ。そうだ、水は正直だから、水で決めよう」とおっしゃいました。「おまえたちの頭から頭へ樋をかけ渡して、水を流しこもう。水は低いほうへ流れるからな」

阿弥陀さまは、八ヶ岳のてっぺんから、富士山のてっぺんに、樋をかけ渡しました。そして、水を流しこむと、水は、富士山のてっぺんに向かって流れました。

「富士の女神よ、おまえのほうが低い。もう争いはするな」と、阿弥陀さまはおっしゃいました。

ところが、富士の女神さまは、くやしがつて、太い棒で八ヶ岳の頭をたたきました。すると、頭は八つに割れて、八つの峰ができたということです。

おしまい

原話：『口碑伝説集』北巨摩郡教育会
再話：村上郁